

# 2012 年度学生授業アンケート報告書

## □ 1. 学生による授業評価について

### §1.1 今回の学生による授業評価について

本報告書は、2012 年度に行った教育学研究科による第8 回目の学生による授業評価アンケートの集計分析報告である。これまでのアンケートは、2009年度までは、教育学研究科（教育学部）の提供する講義、演習を対象に行い、2010年度には教職教育科目について実施した。今年度は、初めて、学部1 回生の入学初年度における受講科目を対象とした。具体的には、①1 回生配当の必修科目であり、前期・後期を通じて開講される、「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」についての授業評価アンケートと、②各学生が初年度に受講した科目の授業全般における授業評価アンケートをおこなった。

11 月下旬から12月初旬にかけて、「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」の授業担当者に、自己点検・評価委員会委員長と教職教育委員会委員長の連名で、協力の依頼をおこなった。12 月上旬までに担当者より協力の回答を得て、12 月中の実施を依頼し、12月下旬に実施された。回答数は43人であった。

## □ 2 . 「学生による授業アンケート」の結果と分析

### §2.1 回答者の属性

今回のアンケートは、必修授業である教育研究入門Ⅱの後期終盤の授業終了時に実施した。回答者数は43人ですべて1回生であった。うち、男性が24人、女性が19人であった。また、入学試験の種類別では、文系入試が36人（うち、男性19人、女性17人）、理系入試が7人（うち、男性5人、女性2人）であった。授業終了直後にアンケートを配布・回収しているため、回収率は100%であった。

### §2.2 「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」についてのアンケート結果の分析

#### ■問1の分析結果

問1では、当該授業に対する総合的評価として、「満足している(満足感)」「得たものがある(獲得感)」「役に立った(役立ち感)」の3点について、どの程度あてはまるかを「あ

てはまる」から「あてはまらない」までの5段階で回答を求めた。この結果を表1に示した。

**表1 教育研究入門Ⅰ・Ⅱの授業に対する「満足感」**

問1(満足している)	人数(人)	
あてはまる	7	16.28%
どちらかといえばあてはまる	25	58.14%
どちらともいえない	7	16.28%
どちらかといえばあてはまらない	2	4.65%
あてはまらない	2	4.65%
合計	43	100.00%

**表2 教育研究入門Ⅰ・Ⅱの授業に対する「獲得感」**

問1(得たものがある)	人数(人)	
あてはまる	13	30.23%
どちらかといえばあてはまる	20	46.51%
どちらともいえない	7	16.28%
どちらかといえばあてはまらない	2	4.65%
あてはまらない	1	2.33%
合計	43	100.00%

**表3 教育研究入門Ⅰ・Ⅱの授業に対する「役立ち感」**

問1(役に立った)	人数(人)	
あてはまる	5	11.63%
どちらかといえばあてはまる	19	44.19%
どちらともいえない	11	25.58%
どちらかといえばあてはまらない	6	13.95%
あてはまらない	2	4.65%
合計	43	100.00%

「あてはまる」ないし「どちらかといえばあてはまる」と肯定的に評価した者の割合を示すと、「満足している」については74.42%、「得たものがある」については76.74%、「役に立った」については55.81%であった。これまでおこなった、2回生以上を対象とした授業や教職科目についての同じ設問への回答では、「満足している」「得たものがある」については肯定的な評価の割合が概ね80%以上であったのに比較すると、今回は70パーセント台とやや低めであった。「役に立った」については、例年の2回生以上の授業について

の回答では8割以上であるのに比べると低い、今回は55%台と、2010年の教職科目についての回答と同程度であった。この結果の分析については、受講生のレディネスや受講動機を視野に入れて考える必要がある。

また、個々の受講生について、「満足感」「獲得感」「役立ち感」の回答パターンを検討したところ、全て肯定的評価を回答している者は23人、全て否定的評価を回答している者は3人、全て中立的評価を回答している者は4人、肯定的評価と中立的評価により回答している者は8人、肯定と否定あるいは肯定・中立・否定が混在している者は5人であった。

### 「役に立った」点に関する自由記述の分析

アンケートでは、どのような点で「役に立った」かについて自由記述で回答を求めている。「役に立った」に「あてはまる」ないし「どちらかといえばあてはまる」と回答した24人中、16人が「役に立った」理由として、「教育学部の各系がどのような研究をおこなっているのかについて概要を知ることができ、進路を考えるヒントになった」という点をあげており、8人は「視野が広がった」点をあげていた。すなわち、「役に立った」という点で肯定的に評価している者のうち3分の2にあたる人が、“自分の進路選択”というアイデンティティにかかわる点と絡めて評価している。

つまり、①1回生は、広く教養を身に着け、自らが生きていく上で“自分の視野やものの見方”を広げていくことに加えて、“生きるテーマ”と“進路選択”をめぐって模索していく段階であり、②「教育研究入門」が、まさしくそのような1回生のレディネスや受講動機に沿った形で、進路へとつながる専門性への水路づけとして開講されているものであると言える。また、このことが、今回の「満足している」「得たものがある」肯定的評価の割合よりも「役に立つ」肯定的評価の割合が低いことや、2回生以上の授業評価アンケートにおける「役に立った」評価の割合に比べて低いことを理解するポイントの一つと考えられる。この点について理解するには、「役に立った」点についてのみの自由記述だけでなく、「役に立った」という点で否定的評価をしている者にも自由記述を求める必要があるかと思われるが、今回の「役に立った」点の自由記述意見のみから検討するならば、2回生以上のように、自らの進路の方向性がより定まった段階で、より専門性が高い授業を受講する場合の方が、自らのアイデンティティ形成に関するより直接的な手ごたえとして「役立つ」実感を得ることになると考えられ、それに比べると、1回生向けの入門授業は、一定の「満足」や「得たものがある」実感はあっても、自らのアイデンティティ形成にまつわる直接的で具体的な「役立つ」実感は若干乏しくなるものと考えられる。

### ■問2の分析結果：教育研究入門I・IIの感想

問2は、「この授業について」印象や感想について、15個の評価語から「あてはまるもの」を回答数に制限を加えずに選択させたものである(表4)。上位にあげられたものは、

1位「おもしろかった」(24人・55.81%)、2位「考えさせられた」(21人・48.84%)、3位「考えが深まった」(17人・39.53%)、4位「惹かれたものがあった」(15人・34.88%)、5位「視野がひらけた」(14人・32.56%)、6位「認識が変わった」・「自分の興味にあっていた」(12人・27.91%)であり、肯定的評価が集中する結果となった。評価語の順位から見た場合、上位に肯定的評価が並び、下位に否定的評価が並ぶという点については、例年の2回生以上配当の授業科目・教職科目に対する評価とほぼ同様の傾向であった。

**表4 教育研究入門Ⅰ・Ⅱの授業に対する「感想」**

問2(降順)	人数(人)	
おもしろかった	24	55.81%
考えさせられた	21	48.84%
考えが深まった	17	39.53%
惹かれたものがあった	15	34.88%
視野がひらけた	14	32.56%
認識が変わった	12	27.91%
自分の興味にあっていた	12	27.91%
たいくつだった	10	23.26%
つまらなかった	9	20.93%
難しかった	6	13.95%
負担が大きかった	3	6.98%
ありきたりだった	3	6.98%
熱意が伝わった	3	6.98%
なじめなかった	1	2.33%
ついていけなかった	0	0.00%

ただし、回答者数に対する割合で見た場合、7位「たいくつだった」(10人・23.26%)・8位「つまらなかった」(9人・20.93%)と回答した者は2割以上を占めている。今回は対象者が教育学部の1回生に限られ、人数も少ないため、単純には比較しにくいだが、例年の2回生以上の授業評価に比べるとずいぶん割合が大きい点が特徴としてあげられる。

この点に関して、個々の受講生の回答傾向を検討したところ、否定的評価のみの回答が見られたのは2人のみで、いずれも「たいくつだった」との回答であった。この2人については、問1の総合的評価でも「満足感」「獲得感」「役立ち感」のいずれも否定的評価を回答していたが、後に述べる「1回生の京都大学入学後の学習全体」に関するアンケートにおいては、自らの学習について「達成度」が高く、「自学自習」に取り組めたと評価している。このことから、自学自習をベースに探究的に学んでいくことのできる者にとっては、教育研究入門のような、入門的な概論授業はむしろ物足りないということがあるか

もしれない。

しかし、この2人以外については、たとえ問1の総合的評価が否定的な者でも、問2で「たいくつだった」「つまらなかった」と並んで「考えが深まった」という肯定的評価も回答している者も見られた。さらには、総合的評価として肯定的回答が見られる者でも、問2では「おもしろかった」などの肯定的評価と同時に「たいくつだった」「つまらなかった」といった否定的評価を回答している者もいる。これらのことから、自学自習をベースにした学びを進めていけるタイプの中の、ごく一部の受講生を除いて、いずれの受講生も、授業内容にはどこかに興味を惹かれていることがわかる。一方で、その時点では興味をもてない内容もあり、面白いと感じるものが相対的に多かったと感じるか少なかったと感じるかで、総合評価の肯定・否定が分かれていると考えられる。

10位の「難しかった」(6人・13.95%)は、2010年度の教職科目についての評価に比べると割合がやや多く、例年の2回生以上の授業評価に比べると割合が少ない。従来の授業評価アンケートの分析では、「難しかった」という回答が必ずしも否定的な意味とは限らず、「やりがいがあった」という気持ちを反映している可能性も指摘されているので、その点を考慮すれば一概に判断はできない。

#### ■問3の分析結果： 教育研究入門I・IIに期待すること

問3は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである(表5)。「最も期待すること」としては、1位「知識や理解を深められる」(21人)、2位「自分の問題意識を磨ける」(8人)、3位「多面的な考察ができる」(5人)の順に多い。「次に期待すること」としては1位「自分の問題意識を磨ける」(12人)、2位「主要な論点や最新動向に触れられる」(10人)、3位「多面的な考察ができる」(8人)の順に多い。

表5 教育研究入門I・IIの授業に「期待すること」(最も・次に)

問3	最もあてはまる	次にあてはまる
a. 知識や理解を深められる	21	7
b. 方法論を身につけられる	1	3
c. 自分の問題意識を磨ける	8	12
d. 主要な論点や最新動向に触れられる	4	10
e. 多面的な考察ができる	5	8
f. 自分の問題意識を検討できる	3	2
g. その他	0	0
無回答・無効回答	1	1
合計	43	43

「最も期待すること」と「次に期待すること」を合わせた結果では、1位「知識や理解を

深められる」(28人)、2位「自分の問題意識を磨ける」(20人)、3位「主要な論点や最新動向に触れられる」(14人)、4位「多面的な考察ができる」(13人)の順に多い。全体に、「知識・理解」の拡充と「主要論点」の把握、「問題意識」の明確化につながるようなことが期待されており、1回生の入門段階の特徴と言えよう。一方、「方法論を身につけられる」は「最も期待すること」では1人で最下位、「次に期待すること」の3人を含めても、トータルで最も少なかった。従来の2回生以上の授業評価アンケートでは「方法論」が上位に入っているのとは対照的な結果であり、「方法論」に対する希求というのは、やはり専門領域に関する基本的知識をある程度もった上で生じてくるものと考えられる。

#### ■問4の分析結果： 教育研究入門Ⅰ・Ⅱに期待することの達成度

問4では「問3で選んだことからの達成度」を「達成できている」から「達成できていない」まで4段階で評価を求めた(表6)。「達成できている」は0人、「まあまあ達成できている」は31人で72.09%であった。例年の2回生以上の授業評価アンケートにおける同じ設問に対する肯定的評価の割合は8割前後であるのに比べると若干低めではあるが、まずまず高い達成度の認識を示している。一方で、「達成できていない」は1人ととどまるものの、「あまり達成できていない」(11人)を含めて、3割近くの人がやや達成感が得られていない認識を示している。

表6 教育研究入門Ⅰ・Ⅱの授業に「期待すること」に対する「達成度」

問4	人数(人)	
達成できている	0	0.00%
まあまあ達成できている	31	72.09%
あまり達成できていない	11	25.58%
達成できていない	1	2.33%
合計	43	100.00%

なお、各受講生の回答パターンを検討したところ、問1や問2の授業に対する総合的評価や、問3の授業に期待するものと、問4の回答との間には、特に法則性は見出されなかった。問1・問2・問4にすべて否定的評価を回答していた受講生は、問2の分析でも挙げた2人のみであった。授業そのものへの評価や期待についての判断基準と、授業に求めるものに対する達成度の判断基準は、個人によって、共通の基準であったり、別の基準であったり、さまざまな様相がうかがわれる。

#### 「達成度」評価に対する理由に関する自由記述の分析

アンケートでは、問4の達成度評価の理由について、自由記述で回答を求めている。これらについて、①「まあまあ達成できている」と回答している者と、②「あまり達成でき

ていない」「達成できていない」と回答している者とに大きく2つに分けて分析する。

「まあまあ達成できている」と回答している理由としては、「まったく知らない状態から、各領域の全般的な知識や考え方を広く知ることができた」というものがほとんどであった。そのような入門的な授業であるため、「知識が深まったとまでは言えない」という点で達成度を「まあまあ」にとどめたと述べている者も見られた。

「あまり達成できていない」「達成できていない」と回答している12人のうち9名がその理由を回答しており、理由としては大きくわけて以下の3つが見られた。①「入門授業」であるゆえの「内容の浅さ」や「まだ授業で扱われていない内容があるため」という理由をあげる者が3人見られ、「授業内容のバラエティを増す」など授業の改善を希望する者と、「それを自分自身の目標として来年度以降の勉学に向かう」と考える者に分かれた。②「内容が各教員の個人的な専門に偏り過ぎている」と感じている者が3人見られ、いずれも局所的な内容とその専門領域の全体との関係のつかめなさを訴えるものであった。③「自分自身の興味関心を把握できていないため、自発的に向き合えなかった」点をあげる者が3人見られ、いずれも自分自身の取り組みを見直し、自学自習することを解決策としてあげている。

上記の①の「内容の浅さ」や②の「授業内容と当該分野の全体像との関係のつかめなさ」等は、これまでの授業評価アンケートでも、概論授業に対するコメントとしてあげられ、概論授業としての限界でもある一方で、工夫の余地の可能性も指摘されてきた。これに関して、今回の自由記述における回答では、①②のいずれの場合も、③の「自らの問題意識」に対するコミットメントの問題との関連が示唆されているといえる。9人中の約半数が「達成できなさ」を内発的に動機づけに転換しようとしており、授業内容が直接的に明確な方向付けにつながるというわけでもなくとも、自らの次の一歩へのきっかけにはなりえていることが推察され、こうした側面を視野に入れて授業を考えることも大切なことと考えられる。また、「達成できなさ」を授業の問題として捉えている約半数の場合も、授業にはやはり「知識・理解」の拡充・「主要論点・最新動向」の把握・「問題意識」の明確化といった点を求めているのは他の受講生と同じであり、それらに当該授業の内容がどうつながるかが見えないことに苛立ちを感じているようである。その見えなさは、自分の問題意識や興味関心の不明確さと、総論と各論・特論のつながりを自ら見出すことの苦手さがあるように見受けられ、こうした点も視野に入れての授業の工夫を考える余地があるかもしれない。

## ■問5の分析結果

問5では、授業に対して「こころがけていること」を7つ中3つまで答えさせるものである。回答の多い順では「欠かさず出席」「問題意識と照らし合わせて授業理解」「集中して授業を聞く」「能動的に授業に臨む」「授業以外に自主的に勉強」と続き、この順番は

ここ5年間で全く変わっていない（表 7）。

表 7 授業に対して「心がけていること」

問 5 心がけていること(3つまで)(降順)	人数(人)	
a. 欠かさず出席	26	60.47%
d. 問題意識と照らし合わせて理解	19	44.19%
g. 集中して授業を聴く	15	34.88%
b. 能動的に授業に臨む	10	23.26%
c. 授業以外に自主的に勉強	3	6.98%
h. その他	1	2.33%
e. 積極的に発言と質問	0	0.00%
f. 時間内に疑問点を解決	0	0.00%

#### ■問6 (自由記述) の分析結果

問 6 では、問 5 で受講生が回答した「授業で心掛けていること」が実際に機能しやすくなるように、授業の側が「工夫・改善したほうが良いこと」について自由記述での回答を求めた。この設問については回答者数が11人と少なかったが、以下の意見が見られた。

##### ① 授業内容について 2人

「授業内容に偏りがある。もう少し系統だった知識を身に着きたい」 1人

「各領域の専門について、もう少し広い範囲で知りたい」 1人

##### ② 授業形態について 3人

「一方向で講義を聴いているだけでなく、学生がディスカッションしたり作業したりする時間も取り入れてほしい」 2人

「学生側の問題意識や意見も聞きたい。学生のレポートでの意見などを吸い上げて授業でフィードバックする等」 1人

##### ③ 教員の話し方について 2人

「早口でききとれないことがある」 1人

「声が小さすぎてききとれないことがある」 1人

##### ④ 授業の出席について 1人

「自分の興味関心によって出席・欠席ができるようにしてほしい」 1人

⑤ 特になし 3人

「大学では自分が何をやるかなので、授業に対してどのように取り組むかは個人の判断だと思う」1人

このうち、①の授業内容の偏りについての意見は、問4の達成度評価にまつわる自由記述での回答にも見られたものであり、問4とは異なる受講生からの意見である。授業にまつわる評価の肯定・否定にかかわらず見られる意見と言える。ある専門領域において、いかに独創的な観点からテーマを絞り込み、掘り下げ、ひとつの普遍性を見出すか、といった点を講義することには大きな意味があると考えられるし、リレー講義の魅力の一つであると考えられるが、入門段階においては、当該領域についての基礎的な地図のようなものが描けていないため、まだ個々の研究者の独創的なアプローチや知見をどう位置付けてとらえればよいのかに戸惑いを感じるものも多いということだと考えられる。今回のアンケートでは、授業にまつわる評価が一貫して否定的である受講生は2人とごく少数であり、しかも自学自習を進めていけるタイプの学生ではあったが、この2人が感じていたのもまさしく、本質的な学びを求めるからこそ、総論と各論・特論のつながりの見えにくさ、納得しがたさへの不満であった。この点に配慮することで、さまざまなタイプの受講生全員の理解度やコミットメントの向上が期待できると考えられる。

## §2.3 1回生の京都大学入学後の学習についてのアンケート結果の分析

以下の問7から問12は、1回生を対象に、京都大学入学後の学習について問うたものである。

### ■問7の分析結果

問7では、入学後の学習の満足度について、「満足している」から「満足していない」までの5段階で回答を求めた。

その結果、「満足している」(2人・4.65%)、「ある程度満足している」(26人・60.47%)と、肯定的評価を回答している者が65%強であり、「どちらとも言えない」(10人)が23.26%、「あまり満足していない」(5人)が11.63%であった。

表8

問7(入学後の学習について)	人数(人)	
満足している	2	4.65%
ある程度満足している	26	60.47%
どちらともいえない	10	23.26%
あまり満足していない	5	11.63%

満足していない	0	0.00%
合計	43	100.00%

#### ■問8(自由記述)の分析結果

問8では、入学後の学習の「良かった」点について自由記述で回答を求めた。問7の結果と合わせた形で分析をおこなう。

「満足している」「ある程度満足している」と肯定的評価を回答している者(28人)のうち、問8に自由記述で回答した23人が挙げる良かった点は以下の通りである。

- ① 自由に自分の興味に応じて自主的に学ぶことができる 12人
- ② 今まで触れることのなかった、さまざまな分野を幅広く学べ、興味関心が広がった 8人
- ③ 多様な授業の中でつながりが見出せた 1人
- ④ 第一線で活躍している教員の授業を受けられる 1人
- ⑤ 高校時代より時間は減ったが、英語に触れる時間がある 1人

「良かった」点としては、大きくは、最も多かった①「自由に自分の興味に応じて自主的に学ぶことができる」点と、次に多かった②「今まで触れることのなかった、さまざまな分野を幅広く学べ、興味関心が広がった」の2点に集約され、③④も①「自由に自主的に学べる」点と②「幅広く学べ、視野が広がった」点に関連する観点と言える。

最も多かった①「自由に自主的に学べる」点は、多分に“自学・自習”の要素を強調する者が多く、高校と違って、自分の興味関心にしがたって科目履修でき、またその選択の幅が広いことや、課題に対して自分の考えで主体的に取り組むことなどが挙げられており、「自分で調べる課題があってよかった」というコメントも複数見られた。次に多かった②「幅広く学べ、視野が広がった」については、高校までの生活視野にはなかった領域や観点到に触れ、自らの目で物事を捉えていく刺激となった点を挙げる者が多かった。④「第一線で活躍している教員の授業を受けられる」というコメントも、大きくは②に含まれるものと思われる。また、③「多様な授業の中でつながりが見出せた」というコメントも、①と②の両方を含み、かつ、自学・自習につながる姿勢と考えられる。

「どちらとも言えない」と回答している者(10人)のうち、問8に回答している8人が挙げる良かった点は以下の通りである。

- ① さまざまな分野に触れられた・興味関心や視野が広がった・思いつきもしない考え方に

触れられ刺激をもらった 5人

- ② 自分で調べたり勉強したりすることで、さまざまな考え方に触れられた・面白さがわかった 2人
- ③ 高校と比べ、内容が専門的 1人

「良かった」点として挙げられた理由は、基本的に①「幅広く学べ、視野が広がった」点と②「自主的に学び、視野が広がった・面白さがわかった」点の2つに集約され、これらは、「満足」していると回答している者が挙げているものと、基本的には共通する観点である。しかし、「満足」している者においては、「自由に自主的に学べる」点を挙げる者が「幅広く学べ、視野が広がった」点を挙げる者よりも多かったのに対し、「どちらでもない」と回答している者では、「幅広く学べ、視野が広がった」点を挙げる者が多く、「自主的に学ぶ」点については、コメントのニュアンスとしては、「テストに向けて自分でしっかり勉強してみたら面白いと分かった」など、日頃から自学自習をして面白さを感じていたというよりは、ようやく、主体的に学ぶことで面白さに目覚め始めた、というものであった。このことは「自学自習による主体的な学び」を得ている度合いが、「満足」の度合いにつながることを示唆していると思われる。

「あまり満足していない」(5人)のうち、問8に回答している4人が挙げる良かった点は以下の通りである。

- ① いろいろな教授の話聞いた 1人
- ② これまで接点がなかった分野について多少ではあるが得られるようになった 1人
- ③ 興味がなかった分野についても、周りに刺激をうけて学ぶようになった 1人
- ④ 専門とするであろう分野に関する本を読もうと思い、そうした本を入手した 1人

「良かった」点として挙げられた理由のポイントとしては、基本的に①「幅広く学べた」点、②「視野が広がった」点、③「自主的に学ぶ気になった」点に集約されよう。これらは、「満足」している、あるいは「どちらでもない」と回答している者が挙げているものと、基本的には共通する観点である。しかし、レディネスとして、学ぶ対象に対する興味関心が低い状態であったことが強調されており、そこから少しでも獲得したものがあるという結果を挙げる者と、そこから少し主体的にコミットしうる方向に向かった、という姿勢を挙げる者にわかれた。「あまり満足していない」のは、やはり、「主体的な学び」につながっている度合いと関連することが示唆され、「あまり満足していない」人は、“自分が興味をもって主体的にコミットできず、何かを得た感じを持ちにくい”けれども、その中でも、少しでも何かを得た感じが得られたり、少しでも主体的にコミットしうる方向に向かうことができると「満足」に一步近づくと、ということが言えそうである。

## ■問9(自由記述)の分析結果

問8では、入学後の学習の「改善すべき」点について自由記述で回答を求めた。問7の結果と合わせた形で分析をおこなう。

「満足している」「ある程度満足している」と肯定的評価を回答している者(28人)のうち、問8に自由記述で回答した18人が挙げる改善すべき点は以下の通りである。

### ●受講生自身の取り組みの改善点

- ① 自習時間をもう少しとる・さまざまな分野の知識を得た後、自分なりにじっくりと考察し論理を展開する 2人
- ② 授業を入れ過ぎない・授業に出るだけで学習が終わってしまう 2人
- ③ どの授業にも積極的にとりくむ・モチベーションの維持 2人
- ④ 積極的に問題意識を向上させる・進んで勉強する 3人
- ⑤ 英語をもっと勉強すべきだった 1人

### ●授業の改善点

#### ①教員の要因

- ・一般教養だからか、授業に対してやる気のない教員が目立つ
- ・出席点があって、面白くない授業は改善してほしい
- ・教員間の差

#### ②授業の進め方・授業形態

- ・スライドの切り替えが早くてついていけない
- ・少人数制を増やす

#### ③履修

- ・履修人数の制限が厳しい
- ・各群の履修単位数などの縛りは不要
- ・出席

「どちらとも言えない」と回答している者(10人)のうち、問9に回答している7人が挙げる改善すべき点は以下の通りである。

### ●受講生自身の取り組みの改善点

- ① もっと能動的・自発的に学ぶ・教養を深める 4人

②単位をとることではなく、自分を深めることを目的として取り組む 1人

③興味のない授業に出るのではなく、自分の興味のある学習をする 1人

#### ●授業の改善点

①役に立つ科目とそうでない科目の差が激しい 1人

「あまり満足していない」(5人)のうち、問9に回答している3人が挙げる改善すべき点は以下の通りである。

#### ●受講生自身の取り組みの改善点

①入手して読んでいない本があるのでとりあえず読んでみる。教授と話しに行ってみる。  
1人

#### ●授業の改善点

①一般教養が深く狭すぎる 1人

②数学などの授業では、公式とその証明ばかりやっているの、初回のオリエンテーション等で演習も受講するよう勧めてほしかった 1人

以上のように、「入学後の学習」に満足の度合いに関わらず、「改善点」に「自らの取り組みの改善点」を挙げる者については、全体に、「自学自習による主体的な学び」に向かっているか、という点を改善点として挙げている。ただし、「満足」度の高い者の方が、そのような学びをコンスタントに行うための全体的かつ具体的な態勢を整えようとするアイデアを持っているのに対し、「どちらでもない」者はより抽象的なレベルでのやる気を述べている者が多く、「満足」度の低い者は、1名だけであるが、とりあえずの“とりかかり”ポイントについて述べている、というように、「満足」度の違いによって、「主体的な学び」につながる姿勢に伴うパースペクティブのあり方に違いが見られる。

一方、「改善点」に「授業側の改善点」を挙げる者については、「満足」度が高い者においては、「教員のやる気」などの差や「履修制限」が主体的な学びを阻害するものとして感じられる者がおり、個々の授業の進め方などで、主体的な学びをしにくく感じるポイントを指摘しているのに対し、「満足」度が低い者においては、教育研究入門の授業アンケート結果でも見られた、“教員個人の専門とその領域全体のつながりの見えにくさ、位置づけにくさ”を挙げる者と、“系統だてて学ぶための履修指導”を求める者が見られた。つまり、これまでの回答とあわせて考えると、「満足」度が高い者は、多様な刺激を求める気持ちが強く、多様なことを学ぶ中で、自分なりにある程度の理解を束ねつつ、かつ、新たな疑問を次のモチベーションにつなげつつ、わかったこととわからないことを随時ある程度明確にしなが、開放系としての学びを進めていくことができる人たちであると考

えられる。そのため、そもそも教員のやる気が低いとせつかくのモチベーションが上がらないことに苛立ったり、さまざまな履修制限が足かせと感じられたり、「スライドの切り替えが早すぎる」といったことが、授業中に主体的に理解を進めることを阻害するように感じたりする、と考えられる。一方、「満足」度が低い者は、どちらかというところ、「系統だてて学びたい」という志向性があり、少なくとも学びの入り口としては、自分で物事を整理しながら系統だてていくよりは、あらかじめ系統だてて説明してもらうことで、理解できたと感じるような、閉鎖系の学びを求める傾向がありそうである。大学での学びは、人生での学びがそうであるように、「これらをここまで学べば十分である」というような範囲や上限があるわけではなく、根本的には、自学自習による学びの追究、つまりは、物事を捉える視座や自分の捉えていることを見直しながらよりよく理解していく姿勢をどう形成していくか、ということをはかにかに学ぶかであろうと思われる。そのような姿勢へと自ら育っていきけるようにするには、必要に応じて、授業内容や説明の仕方において、系統だてた提示の仕方を工夫することや、授業をきっかけにして自主的な学びに踏み出せるような工夫も重要であろうと考えられる。おそらくは多くの教員がそのように既に配慮して授業を構成しているものと思われるが、「わかりにくさ」を訴える受講生の「わかりにくい」ポイントは学年によっても異なると考えられ、常にそうした点をつかむ工夫も必要となろう。その取組が他の多くの受講生のわかりやすさにもつながるものと思われる。

#### ■問10の分析結果

問10では、入学後の学習において、どの程度「自学・自習」できたかについて、「自学・自習ができていない」から「自学・自習ができていない」までの5段階で回答を求めた。

その結果、「できている」(1人・2.33%)、「ある程度できている」(13人・30.23%)と、肯定的評価を回答している者が3割強であり、「どちらとも言えない」(5人)が11.63%、「あまりできていない」(18人)が41.86%、「できていない」(5人)が11.63%と、否定的評価を回答している者が5割強、「無回答」(1人)が2.33%であった。

表9

問10(自学・自習について)	人数 (人)	
できている	1	2.33%
ある程度できている	13	30.23%
どちらともいえない	5	11.63%
あまりできていない	18	41.86%
できていない	5	11.63%
無回答	1	2.33%

合計	43	100.00%
----	----	---------

問7の満足度と照らしてみた場合、満足度が肯定的な28人中11人が、自学自習が「できている・ある程度できている」、「どちらともいえない」は5人、「できていない・あまりできていない」は11人、無効1人であった。満足度について「どちらともいえない」と回答した10人中、自学自習が「ある程度できている」は2人、「できていない・あまりできていない」は8人であった。「あまり満足していない」5人中、自学自習が「ある程度できている」は1人、「できていない・あまりできていない」は4人であった。

これらの結果から、満足度が高い者については、自学自習が「できている」という評価の者と「できていない」という評価の者が半々に分かれたが、満足度が低い者や「どちらでもない」者においては、8割が自学自習が「できていない」という評価といえる。

#### ■問11(自由記述)の分析結果

問11では、「自学・自習をする上で大学に求める支援」について自由記述で回答を求め、26人から回答が寄せられた。問10の結果と合わせた形で分析をおこなう。

問10で自学自習が「できている」(1人・2.33%)・「ある程度できている」(13人・30.23%)と、肯定的評価を回答している者のうち、問11に回答した8人は以下の点を挙げている。

- ① 特になし 3人
- ② 文献・書籍の紹介 2人
  - ・授業での文献リスト
  - ・生協の書籍コーナーでの各分野の教員推薦書籍の紹介
- ③ 自習室の24時間営業 1人
- ④ 授業回数等の確保よりも自学・自習時間の確保 1人
- ⑤ TOEIC対策 1人
- ⑥ 自宅通学者への支援 1人

問10で自学自習ができているかどうかについて「どちらとも言えない」と回答した5人のうち、問11に回答した3人については以下の意見を述べている。

- ① 自習スペースの利用時間の延長 2人
- ② 特になし 1人

問10で自学自習が「あまりできていない」(18人)・「できていない」(5人)と否定的評価

を回答している23人のうち、問11に回答した15人については以下の意見が見られる(複数回答あり)。

① 特になし 6人

- ・自学自習は自分の責任なので大学が支援するものではない 2人
- ・自学自習の環境は今のままで十分整っている 2人

② 自学自習のための参考図書の提示 6人

③ 図書館の自学自習用書籍の充実 1人

④ ゼミ紹介など専門領域をよりよく知る機会 1人

⑤ おすすめの学習法の提示 1人

⑥ レポートの書き方講座 1人

⑦ レジューメをKulasisに全てアップしてほしい 1人

#### ■問12(自由記述)の分析結果

問12では、「京都大学で受けた教育や学習に対する支援」についての意見を自由記述で回答を求め、18名から回答を得た。問10の結果と合わせた形で分析をおこなう。

問10で自学自習が「できている」(1人・2.33%)・「ある程度できている」(13人・30.23%)と、肯定的評価を回答している者のうち、問12に回答した5人は以下の点を挙げている。

① 大学の提供する支援は十分であり、支援は学ぶ姿勢によって得られるものとするもの 2人

「質問に行くと先生方はほぼ例外なく丁寧に回答して下さるので、自学自習より、自ら疑問を抽出して授業に臨むことができれば、かなり恵まれた環境にあると思う」

「学生の自由が多く、学びたいことが学びやすい」

② カリキュラムに関するもの 1人

「一般教養の要取得単位数が多い。一回生からもう少し専門的なことを学びたい」

③ 環境に関するもの 1人

「無料の印刷機がほしい」

④ 特になし 1人

問10で自学自習ができているかどうかについて「どちらとも言えない」と回答した5人の

うち、問12に回答した3人については以下の意見を述べている。

- ① 環境に関するもの 2人  
「図書館やメディアセンターが充実している」2人
- ② 授業に関するもの 1人  
「リレー講義は内容の重複が多く、広く浅いものが多い」

問10で自学自習が「あまりできていない」(18人)・「できていない」(5人)と否定的評価を回答している23人のうち、問12に回答している10人については以下の意見が見られる(複数回答あり)。

- ① 現状の教育や教育環境について肯定的なもの 6人  
「全体的には良質の教育を受けられていると思う・恵まれている」4人  
「図書館や学習スペースなどの物質的支援は多い」1人  
「学生の自主責任の度合いが丁度よい」1人
- ② 大学の提供する支援は十分であり、支援は学ぶ姿勢によって得られるものとするもの 1人  
「質問に行くと教員は丁寧に応えてくれるので、もっと自主的に学習して、積極的に質問するための基礎的知識を身に着けなければと感じる」
- ③ 環境に関する意見 2人  
「無料の印刷機がほしい」1人  
「制約や強制がないので下宿生は墮落する」1人
- ④ 教員に関する意見 1人  
「教員によって授業の準備ややる気が大きく異なる」1人
- ⑤ 教育内容に関する意見  
「難しすぎて理解するのに苦労する」1人
- ⑥ 学習支援に関する意見 1人  
「教育や学習に対する支援がそもそも少ない。入学したては、日々の学習や大学の過ごし方についても、何をどうすればよいのかわからず、戸惑うことが多かった」1人

以上のように、自学自習についての自らの取り組みについての評価が肯定的か否定的かにかかわらず、大学の提供する教育や教育環境に関して、肯定的に捉えている者・問題や不満を感じていない者は、問12に回答した18人中11人に上る。図書館等の物質的な教育環境支援や、授業および質問への回答・対応などの教育支援そのものに対しては概ね肯定的で、自学自習に取り組んでいる人はそれらに満足し、取り組みが足りないと感じている人

は、それらに触れることで、“環境は整っているが、自分では取り組めていない”“自分で取り組まねば”といった思いを抱くこともあるようである。

一方、少数意見ではあるが、教育研究入門Ⅰ・Ⅱについてのアンケートの自由記述項目に見られた意見と共通するような、授業や教員に対する意見・要望も見られ、全体的には、自学自習をしたい探究型の人からは、学習環境の“縛り”を緩めてほしいという要望、一方、学ぶことを系統だてて教えてもらいたい享受型の人からは、学びに対する各種の補助についての要望や、学習環境への導入に関する要望が見られた。

### □ 3. まとめ

教育研究入門Ⅰ・Ⅱの「満足感」「獲得感」についての肯定的評価は7割以上と概ね良好であるが、「役立ち感」は5割強とやや低めであった。

当該授業に対する「感想」、「役に立った」理由、「期待すること」等の分析から、1回生という時期は、進路選択をはじめとするアイデンティティ形成上の希求、生きていく上での世界観における視野の拡大への希求があり、教育研究入門Ⅰ・Ⅱはまさしく、こうしたレディネスや動機に沿った形で、教育研究の全体像とエッセンスを俯瞰する形での導入的な授業として開講されているといえる。しかし、レディネスと授業内容がマッチして役立ち感を感じる場合もあるものの、受講生が興味関心や進路の模索段階である上に、授業内容も入門的であるがゆえに、自らの専門性に具体的に役立つといった類の役立ち感はトータルとしては必然的に薄くなる面があると言える。

こうした、いわば、入門者向けの導入的なりレー講義形式の概論授業ならではの“物足りなさ”に関しては、当該授業を通じての学びの「達成度」「とりくみ」「改善案」等の分析から、その“物足りなさ”を自らの学びの動機づけにしようとする者と、“物足りなさ”から、授業や教員あるいは大学に対し、学びに必要な“補助”を求める者に大きく二分された。但し、後者のような、学び促進的な“補助”の希求は、当該授業の全体的評価の肯定・否定に関わらず見受けられる。トータルとしては肯定的に評価している場合であっても、否定的に評価している場合であっても、“物足りなさ”は、学びたい気持ちの裏返しであり、どのような“物足りなさ”を感じているか、どういう“補助”があるとより学びが促進されうると感じているか、といった点が重要であろう。

授業にまつわるさまざまな角度からの自由記述および、1回生の段階での学習全体についての自由記述からは、特に、入門段階では、当該領域の基本的な全体像や基礎的なマッピングをこれからしていこうという状態であるため、各教員の専門的なアプローチや知見をどう位置付けて捉えればよいか戸惑いを感じることも少なくないことがうかがわれた、特に、全体像を自らつむいでいくことに困難を感じ、系統だてた知見を享受したいタイプの人には戸惑いが大きく、総論と各論・特論のつながりの見えにくさ、納得しがたさがあ

る。一方で、自学自習を主体的に進めていける探究タイプの人にとっても、本質的理解を求めるがゆえに、やはり総論と各論・特論のつながりや専門性の本質を噛み砕いた授業を求める場合もあると言える。こうした点に配慮することで、受講生全体の理解度やコミットメントの向上が期待できると考えられる。